



「文久何年」「慶応何年」とラジオから流れてくる年号。私が小学生の頃、100歳の高齢者はまれであった。ラジオを聞きながら、江戸時代に生まれた人がこの昭和の世に！というだけで感動した。

今は令和の世。昭和生まれの活躍が日本中に感動を！それは偶然やまぐれではなく、その人の生き方の積み重ねが必然の花を咲かせた。

ん、う  
さと  
さが  
畠  
あ



辻畑 隆子

ディアに出てからは周りにすぐ人が集まるよう。

尾畠さんの生活全般の様子をテレビの画面で見ていると昭和の懐かしさがちらほら。「お天道様は見てる 尾畠 春夫のことは」のページは取れたての野菜や魚を口にしたような今、今が伝わってくる。その瞬時の尾畠さんをそのまんま切り抜いて文章や写真に記録した著者の白石あづささんが気になる。ご本人は顔も姿も見せない。世界各地を放浪したという彼女は同書で言う。

思えば3年前の夏、瀬戸内海の島で2歳の男の子が行方不明に。延べ約380人で3日ばかりでも見つからず。大分の地から駆け付けたおいちゃんがわずか30分で発見！後にスーパードランディアと呼ばれる尾畠春夫さん。同じ日田町なので時々見掛けるが、メ

「今の日本に必要なものは、他者への想像力とほんの少しの優しさではないか。それこそが、人が生きていく上での希望になるのだと、そんな大切なことを何年もかけて尾畠さんから教わった気がする」と。今の私も救われた。

(彫刻家・日田町)